



第6回年次大会報告

平成22年8月27日（金）から29日（日）にかけて新潟県上越市で仏教看護・ビハーラ学会第6回年次大会が実施されました。本報告書では、画像などを交えて流れと内容をごく簡単に紹介致します。

本大会のテーマは『いのちを興す～縁のちから～』となっており、『「興す」は、初日の会場となる浄興寺の興の字からいただきました。「縁」は仏教で最も重要な教えであり、「一切の事物は、相互に限定し合う無限の相関関係をなして成立している」¹ということ。縁を契機に考えるならば、「すべてのいのちはつながり合っている」と言え、また人生に究極の意味づけを可能とするものとして‘縁’があると言えます。「縁のちから」とは何か。それは、「互いに生かし合う関係性に宿る力」と考えます。そしてそのちからによっていのちを興していきたい、と強く願う。』（大会長あいさつより）という願いを込めた大会となりました。また、この縁を、身口意という3つの切り口から捉え、「縁としての身体」(身)「縁の語り」(口)「縁のこころ」(意)で構成しました。即ち、従来の研究発表やシンポジウムに、ワークショップや市民公開コンサートを加え、多様な内容の大会を目指し企画しました。



大会初日 (8月27日 金)

初日の会場は、国の重要文化財として登録されている真宗浄興寺派 本山 浄興寺としました。浄興寺は、1224年に親鸞聖人が親常陸の国で「教行信証」の完成を喜んでその禅坊を「歓喜踊躍山浄土真宗興行寺」とした名称を略したものであると伝えられており、親鸞聖人ゆかりの地です。近年、コンサートやイベントの会場として市民に親しまれており、地域に根差している寺院として知られています。

概要

名称 仏教看護・ビハーラ学会第6年次大会

開催日時 平成22年8月27日（金）～
平成22年8月29日（日）

開催場所 その1
(名称) 浄興寺
(住所) 〒943-0892 新潟県上越市寺町 2-6-45
(TEL) 025-524-5970

開催場所 その2
(名称) 上越教育大学学校教育実践研究センター
(住所) 〒943-0834 新潟県上越市西城町 1-7-2
(TEL) 025-525-9147

参加者数 214名 (スタッフと報道関係者含む)

大会長 今井洋介 (新潟県立がんセンター新潟病院)
今村達弥 (新津信愛病院)
得丸定子 (上越教育大学)

¹ 『空の論理』中村元選集第22巻(春秋社)

総会の終了直後に、午後1時半よりセンターのロビーにてポスターセッションは行われました。ポスター発表は12題にのぼり、看護・医療・スピリチュアルケア等々各分野における研究報告や実践に関する発表がなされ、多くの参加者を含む討論が行われました。

ポスター発表と題目と発表者の一覧を下記に示します。

- P-1 日本のいのち論構築のための基礎的研究(2)
高崎経済大学地域政策学部 熊澤利和
- P-2 ビハーラ活動者のお念仏の実践と認識 I
龍谷大学 ○伊東秀章、友久久雄
- P-3 ビハーラ活動者のお念仏の実践と認識 II
龍谷大学 ○友久久雄、伊東秀章
- P-4 胃ろうからの栄養中止を希望した終末期口腔がん患者への対応のジレンマ
—臨床倫理検討シートを活用して振り返る—
倉敷第一病院 尾下玲子
- P-6 仏教を背景としたA病院緩和ケア病棟の入院相談の現状
—患者背景と宗教的要素に対する意見から—
長岡西病院ビハーラ病棟 ○村瀬正光、岡村直孝、森田敬史、多賀裕美、徳間一江
- P-7 ささえあう福祉の町づくりを目指して —ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟—
ささえ愛あわやま 神保桂子
- P-8 文学の授業における「関係性」からの視点とその教育
淑徳大学大学院 王岩
- P-9 瞑想は心身にどのような効果を与えるか
—心理尺度調査、生化学検査結果から—
上越教育大学 得丸定子、他
- P-10 生者と死者との関係性に関する再考
兵庫教育大学 郷堀ヨゼフ、他
- P-12 ナイチンゲール看護論の宗教的側面に関する一考察 その2 —『書簡集』を手がかりに看護者のあり方を考える—
淑徳大学大学院 北村園子



図 4 「縁の語り」シンポジウム フロアの様子



図 5 「縁の語り」シンポジウム ベッカー氏



図 6 「縁の語り」シンポジウム 中島孝氏

P-13 実行する仏教者、おっしやんの目指したこと
—愛育園に生きた藤本幸邦老師—

淑徳大学大学院 佐藤成道

P-14 共感から共在へ

—ケアの場面についての思案—

京都大学大学院・南山大学宗教文化
研究所 坂井祐円

ポスター発表に続いて、3会場に分けてワークショップ・セッションが行われました。「縁としての身体1」と題して、高野山大学の井上ウィマラ氏によるヴィパッサナー瞑想、「縁としての身体2」をテーマに五体投地のワークショップを野口法蔵氏が担当、3つ目に、「縁の語り」ワークショップとして大山真弘氏による内観法のセッションが開かれました。観念的討論のみならず、上記の3つの手法を体験した上で、その効果をについて議論することは、ワークショップ最大の目的でした。関係性を紡ぎ出す手法として、医療・看護の現場での応用についての議論のために、十分な素材となったと考えられます。

次に、「東アジアにおけるビハーラの展開と現状」をテーマに、国際シンポジウムが開催されました。韓国・台湾・日本における看取りならびにターミナルケアに焦点をあて、仏教と医療との連携活動の現状について各シンポジストの報告を踏まえて、多くの文化的要素を共有する東アジア地域における今後の連携・協力・教育・交流について活発な討議がなされました。以下にシンポジストを紹介いたします。

- 韓国 能行氏（韓国仏教ホスピス協会）、慧棹氏（中央僧伽大学）
- 台湾 宗惇氏（台湾大学）、王英偉氏（慈濟病院）、王珠惠氏（慈濟大学）
- 日本 田宮仁氏（淑徳大学）、打本弘祐氏（桃山学院大学大学院）
- 司会 株本千鶴氏（椋山女学園大学）

本大会でも、夜の部のプログラムとして、誰もが参加できる、とことん語り合う場を設けました。「ラートリカサンガ」と称して、現代社会における“信仰”の役割について、ボランティア隊の心こもった恒例の「おにぎり」を手に、数時間にわたる討論がなされました。



図 7 国際シンポジウムの様子



図 8 国際シンポジウム 王英偉氏



図 9 国際シンポジウム 慧棹氏（韓国）

大会3日目 (8月29日 日)

大会最終日のプログラムは、もっぱら研究発表となりました。朝9時10分より**テーマ指定発表**といった形で、本学会で過去に発表された研究課題をさらに深め、「あらゆるいのちが活かされる社会の可能性」というテーマに沿った研究発表を行いました。研究者と題目は下記のとおりです。

『授かる「いのち」から、作る「いのち」への変化のなかで今考えること』と題し、主に妊娠中絶をめぐる諸問題を取り挙げたのは、淑徳大学大学院の小柴千鶴氏、北村園子氏と伊藤奈津子氏でした。

次に、熊本保健科学大学助産別科/うらさき母乳育児相談室助産院(助産師)の浦崎貞子氏は、新潟水俣病の視座に立ち、上記の発表と類似した形で妊娠規制に関して発表を行いました。テーマは『新潟水俣病事件における「妊娠規制」の検証』でした。

熊本学園大学大学院所属の頼尊恒信氏は、あらゆるいのちが活かされる社会の可能性について真宗障害者運動の立場から検討を行いました。さらに、同じく障害を持つ真宗大谷派の僧侶があつまることから発足した「共成会(ともなりかい)」についての発足と活動意義を報告を、大谷大学大学院の難波教行氏より受けました。

最後に、淑徳大学大学院所属の伊藤奈津子氏は、『日本昔話に読む子どもの「いのち」』をテーマに、少産少死の時代における子どもの「いのち」をめぐる諸問題に注目しました。

5名の発表者の報告を踏まえ、1時間近くにおよぶ全体討論が行われ、コメンテーターの金谷光子氏(新潟医療福祉大学)と座長を務めた今村達弥氏(新津信愛病院)を中心に、活発な討議がなされました。

最後に、**自由演題研究発表**が行われました。1題目は、台湾佛教慈濟大学の釋純寛氏は、台湾佛教慈濟医学センターの心蓮病棟を例としながら、末期患者遺族のグリーフケア実施様式について発表しました。2題目の発表も海外に視線を向けたものであり、椙山女学園大学の株本千鶴氏は「医療・宗教・行政」をキーワードに、韓国におけるホスピス制度化の現状について発表しました。次に、3題目として、韓国の中央僧伽大學校の慧棹氏と金應喆氏による観



図 1 0 研究発表ポスター (ロビーに掲示)



図 1 1 テーマ指定発表 全体討論の様子



図 1 2 研究発表の様子 釋純寛氏 (台湾)

仏教看護・ビハーラ学会第6回年次大会

無量寿経を中心とするビハーラ臨終修行法に関する発表がなされました。

医療法人恵生会南浜病院の栗原愛里氏（新潟医療福祉大学の荒木玲子氏との共同研究）は、4 題目の発表として、患者の思いを活かす看護への仏教看護の活用について報告しました。

最後に、飛騨千光寺・京都大学こころの未来研究センター所属の天下大圓氏は、寺院本堂を舞台とした子育て中の母親対象の瞑想実習について実践報告を行いました。

学会長の藤腹明子氏によるあいさつを最後に、仏教看護・ビハーラ学会第6回年次大会が終了されました。アフターコンベンションとして、海外ゲストを中心に、長岡西病院などで見学（8月30日 月）が行われました。

大会長のコメント：

○ 今井洋介氏 （新潟県立がんセンター新潟病院）

自分のいのちが誰かとつながっている～縁～の実感がもてないために、多くのひとがづらい思いをしています。

「社会の、いかなる場所でも、いのちがいきいきと活かされるように。」縁のちからをあらゆる角度から再確認しよう！というテーマで準備を重ねてきた本大会。

沢山の方々においで頂くことができました。参加して頂いた方の感想を、勿論お叱りの言葉も含め、一つでも多く聞きたい気持ちです。わたくしの個人的な感想は、誠に自分勝手な言い分ではありますが、「この人生の中で、最も愛すべき方々に上越に集まって頂いた」というものです。どこまでも有難い三日間でした。縁のちから、大切さを、身を持って知ることができた。そしてそれは、大会を支えて下さった一人一人の皆さまのお陰です。

心から感謝いたします。

みなさま、どうぞ、お元気で。

そしてこれからも末長くよろしくお願いします。

○ 今村達弥氏 （新津信愛病院）

「縁」ほど縁深い言葉はありません。今大会で、この言葉の縁をどれほど深め得たかと思うと、まだまだやりたいこと語りたことが次々紡ぎ出てきます。課題もたくさんいただきました。まさに縁（エン）ドレス、その実感は共有できたと思います。それぞれの想いは、言葉に発してまた行動に現わしてぶつけ合って初めて検証され磨かれ合うのだと信じさせてもらえました。今後の大会でも臆せず身・口・意を尽くして曝け合っていければと願います。今回何よりの収穫は、スタッフはじめすばらしい出会いと協働の妙が得られたことです。今後ともこの縁を有難くつなげていけたらと思っています。

○ 得丸定子氏 （上越教育大学）

盛りだくさんの内容を有した年次大会でした。私は裏側のコメントを致します。それは、「赤シャツ」ボランティア隊の献身的な支えで、記録的な猛暑にも拘らず、「暖かい」雰囲気の手作り大会ができたことです。企画会社一任の学会開催が多くなった昨今、本大会は失敗や至らなさも含め「微笑ましい」会であったと自負致します。会場が離れた2会場で開催されたため煩雑さは倍増でしたが、陰の赤シャツ隊のお陰で大会が成功裏に終えられました。上杉謙信の里に相応しい献身ぶりでした。事務局隊の開催までの長期間の戦いを始めとして、当日の献身行、つまり、広い本堂の掃除、やけどしながら（？）の熱いおにぎり握り、会場の劣悪音響設備への工夫、不足物の買い走り、コピーや印刷のため5キロ離れた大学への駆けずり、無言のトイレ掃除、腰を痛めながらの託児ルーム運営、発表を全く聞けない受付作業、などなど。赤シャツ隊員が各部署を死守して下さったため大会が運営できたと感謝しています。本大会の功労賞赤シャツ隊へ「縁」紡ぐ握手、拍手。

【作成：大会事務局； 写真撮影：太田宏人氏】